

雲レーダ運用開始	1
大規模洋上風力発電の事業化に向けた合意形成の実践的 研究	2
国立台湾大学気象・気候災害研究センターと学術交流を 締結	2
センター共同研究集会・各種会議報告	3

IHP トレーニングコース	6
地球水循環研究センター公開講演会	6
上田博教授の最終講義および退職記念祝賀会を開催	7
異動教員の挨拶	7
平成 26 年度学位授与	8
人事異動	8

雲レーダ運用開始

地球水循環研究センターは、積雲や巻雲内部の気流構造や雲粒子分布を連続して観測することのできる可搬型の「雲内部構造観測用Kaバンドレーダ(雲レーダ)」を環境共用館屋上に設置して運用を開始しました(写真1)。この雲レーダは、平成24年度補正予算によって、平成26年3月に導入されたもので、試験観測を経て9月より連続観測を行っています。雲レーダは、平成19年に導入された水循環観測マルチパラメータレーダシステム(Xバンドレーダ:波長3 cm)に比べて短い波長(8.6 mm)の電波を用いることで、降水粒子

(雨や雪)よりも小さな雲粒や氷晶粒子を観測することができます。雲レーダの観測範囲は30 km です。観測パラメータとしては、Xバンドレーダと同様に、レーダ反射因子 Z_h 、ドップラー速度 V 、レーダ反射因子差 Z_{DR} 、偏波間位相差 ϕ_{DP} 、偏波間位相差変化率 K_{DP} 、偏波間相関係数 ρ_{hv} などを取得しており、同じ観測対象を異なる波長の電波を用いて観測を行うことができます。

雲レーダ導入後、これまでに降水雲や巻雲についての観測結果を取得することができました。地上での降水が観測されない厚い巻雲(高度5~12 km)の観測事例では、雲内のストリーク構造と雲底部の凹凸構造が見られました。前者は雲内の氷晶粒子の粒径や数濃度の分布が不均一であることを、後者は雲底付近に弱い対流構造があることを示唆していると考えられます。また、薄い巻雲(高度8~11 km)の観測事例では空が透けて見えるような巻雲(写真2)でも-10 dBZ程度のレーダ反射因子 Z_h が検出されています(図1)。また、巻雲内部にストリーク構造も見ることができます。このような薄い巻雲でも検出できるため、Xバンドレーダで



写真1: 環境共用館屋上に設置された雲レーダ。

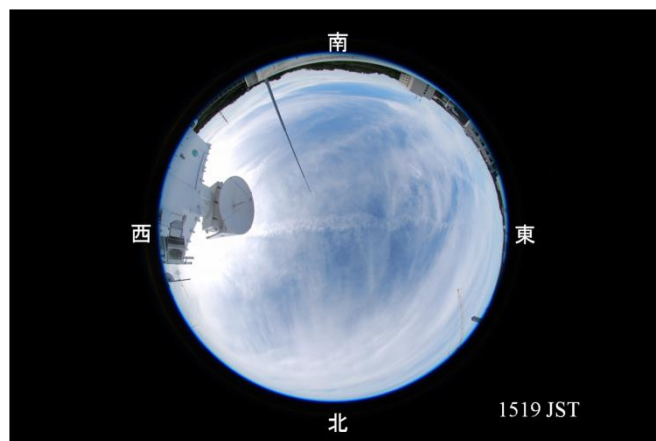


写真2: 平成26年9月12日15時20分頃に魚眼レンズを用いて撮影された全天写真。薄い巻雲があります。

検出できる降水雲だけでなく、様々な雲の理解を進めることができると考えられます。

今後、Xバンド偏波レーダ、衛星観測、雲粒子ゾンデなどにより取得されたデータとの比較を行っていくことで、積乱雲の発生過程や巻雲内部の氷晶粒子の形状に関する研究を行っていくつもりです。また、可搬性を活かして、冬季の北海道や北陸地方における雪雲内の氷晶粒子、九州や沖縄における梅雨前線帯の降水システム内部の雲粒子の分布、台風外縁域の雲物理特性などを対象とした観測も実施していきたいと考えております。この雲レーダは、共同利用機器として、国内外の雲・降水システムに関する共同利用研究に使用していく予定です。

(篠田 太郎)

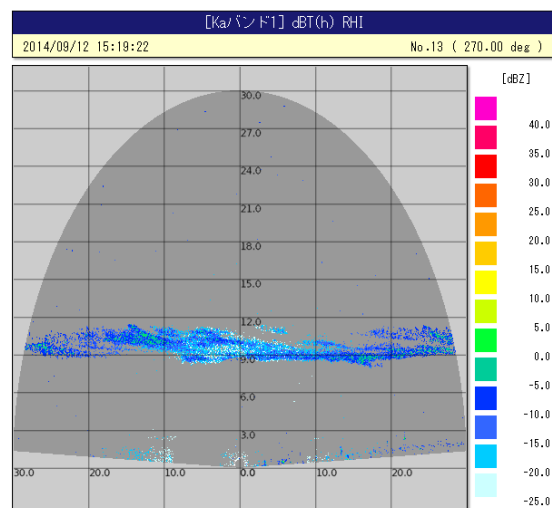


図1：写真2が撮影された時刻に雲レーダで東西方向の鉛直断面で取得されたレーダ反射因子 Z_h のRHI画像。左側が西で、水平距離の刻みは10 km、高度の刻みは3 km毎です。

「大規模洋上風力発電の事業化に向けた合意形成の実践的研究」

寄附研究部門が事業の構想段階から合意形成プロセスのマネジメントを行ってきた、新潟県村上市岩船沖での洋上風力発電事業において、市条例のもと「村上市岩船沖洋上風力発電推進委員会」が設置されるとともに、発電事業者が決定されました。これまで、漁業関係者をはじめ、地区長や観光協会、港湾利用者などの地域関係者と、岩船沖の大規模な洋上風力発電施設の導入可能性について研究会を行い、設置可能な海域や地域メリットについて議論を重ねてきました。その結果、洋上風力発電事業を積極的に推進するという結論に至り、地域の関係者と密接な連携のもと、洋上風力発電の円滑な導入を促進することを目的に、推進委員が設置されました。その後、村上市が発電事業者を募集し、2015年2月に学識経験者などからなる評価委員会において発電事業者が決定されました。寄附研究部門は、こうした手順について市担当者などと議論し、事業推進に対する市の取り組みを支援してきました。また、地域代表者への情報提供や意見交換に加え、沿岸部の地域住民に対し講演会で欧州の洋上風力発電事業について紹介することや、小学校で地域に適した洋上風力発電のあり方について考えるワークショップ

を開催するなど、日本ではまだ馴染みの薄い洋上風力発電に関する情報提供を行ってきました。

また、村上市を含む複数地域での合意形成マネジメントの実践を通して、日本の洋上風力発電事業におけるステークホルダーの種類、合意形成のためのステップ、漁民と洋上風力発電事業の共存方法について、日本・ノルウェーマリンセミナー2014や再生可能エネルギー2014国際会議などで発表しました。(本巢 芽美)



写真3：日本・ノルウェーマリンセミナー2014の様子。

「国立台湾大学気象・気候災害研究センターと学術交流を締結」

地球水循環研究センターは、2014年9月3日(水)、研究所共同館において、国立台湾大学気象・気候災害研究センターとの学術交流協定調印式を行いました。この協定は、2007年に調印された「国立台湾大学と名

古屋大学の学術協定」に基づき、両組織間のさらなる研究協力の推進を図ることを目的として締結されました。

気象・気候災害研究センターは、1999年2月に国立台湾大学附置の研究センターとして設立され、気象の

もたらす災害に関する研究及び気候変動に伴う極端気象に関する先端的研究を行っています。

調印式には地球水循環研究センターから、石坂センター長、協定担当窓口である坪木和久教授、上田博教授ら5名、気象・気候災害研究センターからは、陳泰然台湾大学前副学長、譚義績センター長及び周仲島教授ら9名が出席し、両センター長が協定書へ署名し協定が締結されました。

調印式後には、ミニワークショップが開催され、気象・気候災害研究センターから郭鴻基教授と張倉榮教授、本センターから坪木教授による講演が行われたほか、新たに導入された雲レーダの見学も行われました。

今回の協定締結により、共同研究や学生・研究者交流を通じて両組織に多くの学術的成果がもたらされるだけでなく、台風や大雨などの東アジアの国々が直面

する様々な気象・気候災害に関する研究の発展が期待されます。
(坪木 和久)



写真4：調印式の様子（左が譚義績センター長、右が石坂センター長）。

センター共同研究集会・各種会議報告

「大気海洋相互作用に関する研究集会」

2014年12月6～7日に、京都のホテル本能寺において「大気海洋相互作用に関する研究集会」を開催しました。この研究集会では、若い人に多く発表をしてもらうこと、時間をある程度気にせずしっかり議論を行うこと、を特徴として毎年行っています。今年度は、45名の参加があり、そのうち25名が学生でした。22題の発表があり、例年のことながら活発な議論が行われ、予定時間を大幅に超えての研究集会となりました。大気海洋相互作用に関する様々な研究発表がありましたが、学生の発表には、他大学の学生でも遠慮のない厳しいコメントがあり、最先端の研究成果の紹介だけでなく、教育の場としても本研究集会が機能していることを再確認できました。この研究集会の中から、様々な共同研究、共同観測が実施され共同研究の起点となってきましたが、本研究集会の今後の方針を整理する時期にきていると感じました。（森本 昭彦）



写真5：「大気海洋相互作用に関する研究集会」の集合写真。

「第11回日韓海色ワークショップ」

2014年12月11～12日に、計画研究「静止衛星海色セ

ンサーを利用した沿岸域の流動・生物生産・物質循環に関する研究」の一環として、北海道大学大学院水産科学研究科からの提案により、韓国海洋科学技術院で第11回日韓海色ワークショップ(KJWOC)を開催しました。今回は口頭発表29件、ポスター発表15件で、111名（日本8、韓国98、中国3、台湾2）の参加がありました。韓国が世界に先駆けて静止衛星海色センサー(GOCI)を打ち上げてからすでに4年がたち、着実に成果が出ており、興味を持つ研究者もさらに増えてきていることがわかりました。ただ、大気補正や検証用の現場データの収集の問題を初めとして、まだ韓国国内だけでは解決できない問題も多く、その解決のため、日本の研究者の協力が期待されています。地球水循環研究センターは2014年4月に、この静止衛星のデータ処理を行っている韓国海洋科学技術院韓国海洋衛星センターと学術交流協定を締結し、さらに日本と韓国の研究協力を推進することとしています。（石坂 丞二）



写真6：「第11回日韓海色ワークショップ」の集合写真。

地球水循環研究センター研究集会「航空機観測による大気科学・気候システム研究」

2014年12月19日、東京大学本郷キャンパスの理学部3号館320号室において、地球水循環研究センター研究集会「航空機観測による大気科学・気候システム研究」を開催しました。日本気象学会は、地球観測専用の航空機を導入して大気科学・気候システム研究を推進する計画を日本学術会議の大型研究計画に関するマスタープラン2014に提案しました。しかしながら、この提案は重点課題には採択されませんでした。この経緯を受けて、本研究集会は、この計画の実現を目指して半年間にわたって観測対象や観測測器を再検討してきた結果を紹介するとともに、観測対象領域や期待される成果などを議論することにより、マスタープラン2017に提案する計画をより良いものとし、地球科学研究コミュニティの相互理解を深めることを目的として実施されました。

研究集会には大学、研究機関、民間企業など16の組織から35名の参加者がありました。発表内容も温室効果気体、反応性気体、エアロゾルから雲・降水システム、台風などの気象・気候分野だけでなく、海洋、陸面植生、海氷に関連するものを含めて、合計で17件を数えました。また、航空機だけでなく、飛行艇を用いた研究計画やヘリコプターを用いた観測事例の紹介、衛星観測との連携など多岐にわたる発表がありました。観測専用航空機の保有における課題、これから開発していくべき観測測器、航空機観測を利用した数値モデルの精度評価や観測データの同化手法など、航空機観測の実施に向けた課題についての議論も行われました。

観測的研究拠点である地球水循環研究センターとしては、今後とも研究手段の一つとして航空機観測に力を入れていきたいと考えております。

(石坂 丞二・篠田 太郎)

地球水循環研究センター研究集会「グローバルスケールとメソスケールを貫く気象学」

2014年12月25日と26日の2日間にわたって、名古屋大学環境総合館第2講義室において、地球水循環研究センター研究集会「グローバルスケールとメソスケールを貫く気象学」を開催しました。本研究集会は、相互に作用し合うグローバルスケールとメソスケールの気象現象について、観測、統計解析、モデリングなど手法を問わずに現状の課題について議論することを目的として開催しました。グローバルスケール気象の立場から参加する方には、メソスケールの現象が総観規模の現象に及ぼす影響を議論できるような内容での講演を依頼しました。一方、メソスケール気象の立場から参加する方には、個々の事例解析ではなく、その統

計的な特徴やグローバルスケールの現象とのかかわりについて議論できるような内容での講演を依頼しました。

研究集会には大学、研究機関など11の組織から27名の参加者があり、13件の講演が行われました。将来気候実験における海面水温の変化が台風や温帯低気圧に及ぼす影響や、千島列島周辺で観測された局所的に海面水温が低い領域が大気現象に及ぼす影響、大気環境場が熱帯低気圧と温帯低気圧の発達に及ぼす影響、顕著な降水現象が発生した場合の大気環境場の特徴など、興味深い講演が多くあり、活発な議論が続きました。普段の気象学会では、並行した異なるセッションで発表をしている方々が、同じ研究会で議論を行うことで、お互いの研究内容についての理解を深められたと思います。今後も、このような分野間を結ぶような研究集会を行っていきたいと考えております。

(篠田 太郎)



写真7:「グローバルスケールとメソスケールを貫く気象学」研究集会の様子

「GSMaP および衛星シミュレータ合同研究集会」

本研究集会は、当センター共同研究集会「衛星による高精度降水推定技術の開発とその水文学への利用の研究企画のための集会」(代表:気象研究所 青梨和正氏)および計画研究課題「衛星データシミュレータを用いた数値モデル検証研究」(代表:増永浩彦・篠田太郎)の合同集会として、2015年3月2日朝から3日正午にかけて開催されました。前者は全球降水データプロダクト GSaP の開発者を中心に2009年度から続く「老舗」の研究集会であり、いっぽう後者は衛星シミュレータ活用の普及を狙って2013年度に立ち上げたばかりの新しい課題です。経緯は異なるものの両課題は深い研究分野のつながりがあり、その特色を生かすべく合同研究集会を立ち上げて今回が2年目になります。

GSaP と衛星シミュレータを別セッションで連続させた昨年と異なり、今年度は敢えてセッションを分けて、話題が混在するプログラム編成を試みました。結果的に、それぞれのコミュニティが聞きなれた話に安住す

ることなく、刺激的な研究集会が実現したように思います。全球降水観測計画 GPM やひまわり8号といった新しい衛星データを活用した研究から、降水アルゴリズム技術論の最先端まで、衛星観測を軸につながるさまざまな分野のプロたちの意見交換が活発に行われました。また懇親会では、同日開催されていた当センター主催の別研究集会と合流し、さらに賑やかな交流の場が生まれました。組織統合に向けた節目を迎えつつある中、地球水循環研究センターが共同研究を通じて培ってきたコミュニティ醸成の成果を感じる良い機会でした。

末尾ながら、月曜日の朝から遠方より駆けつけ研究集会を成功に導いて下さった外部研究者のみなさまに、改めて深く感謝します。(増永 浩彦)



写真8:「GSMAp および衛星シミュレータ合同研究集会」の集合写真。

「リモートセンシング・数値モデリングの利用と高度化によるメソ・マイクロスケール大気・海洋現象に関する共同研究」

平成26年度地球水循環研究センターの計算計画「リモートセンシング・数値モデリングの利用と高度化によるメソ・マイクロスケール大気・海洋現象に関する共同研究」の研究集会を、2015年3月2日～3日に名古屋大学野依記念学术交流館で開催しました。2日間で16件の発表があり、38名の参加がありました。この計画研究は当初、気象と海洋分野が個別に行ってきた計画研究を2年前に統合したもので、当センターの特長である異なる分野を融合して新しい研究を開拓・発展させていこうとするものです。

発表された研究には観測を中心とするもの、数値モデルを用いたもの、さらにそれらを組み合わせたものがありましたが、興味深い点は大気と海洋のそれぞれの観測でフェーズドアーレーレーダが用いられるようになってきたことでした。用いる波長帯は異なりますが、観測技術や解析法に共通点があり、情報交換することで双方がより観測技術を高められることが期待されます。今回の研究会では、偏波レーダによる雷予測、火星の雲解像モデルを用いたシミュレーション、当センターが中心となって進めている海洋レーダ、雲解像モデル CReSS のピン法の開発など、前回の研究会から発展し

たものがあり、主宰者としてはたいへん嬉しく思いました。特に若狭湾の急潮の問題はモニタリングから予測に大きく発展しました。一方で、大気フェーズドアーレーレーダ、名大のKaバンド雲レーダ、観測船「みらい」の偏波レーダ、GNSS 反射波による海洋観測、黒潮続流域でのフラックス観測、海底設置型装置による海流観測など、新しい観測技術の報告が多かったのも今回の特徴でした。名大の雲レーダと GPM 衛星観測の比較を行っていこうという報告もありました。さらにメソ気象として、先島諸島の日射で発生する対流雲、関東地方の大雪、メソ対流系の短時間予測法の開発などの興味深い報告がありました。

本計画研究は研究所・センター統合までにもう1年継続することになっています。今回の参加者の研究がさらに発展し、一方で新しい共同研究が加わり、メソ・マイクロスケールの大気・海洋現象についての研究がさらに発展することを期待します。(坪木 和久)

「Asian monsoon Hydroclimate -Review of MAHASRI and Beyond-」

2015年3月4～5日に名古屋大学にて HyARC 共同研究集会課題「アジアモンスーン域における気候変化と植生気候相互作用の解明(代表:松本淳 首都大学東京教授)」と HyARC 計画研究課題「アジアモンスーン域における植生気候相互作用の解明(代表:熊谷朝臣 名古屋大学准教授)」との共催で、ワークショップ「Asian monsoon Hydroclimate -Review of MAHASRI and Beyond-」を開催しました。MAHASRI(モンスーンアジア水文気候研究計画)は GEWEX 傘下の国際研究プロジェクトで、2015年で終了する予定となっています。このワークショップでは GEWEX GHP(水文気候パネル)の共同議長である Jan Polcher 博士と総合地球環境学研究所長の安成哲三博士による招待講演の他に、30名が英語による発表を行いました。ワークショップではこれまでの MAHASRI の研究と今後の計画に対する発表が中心に行われ、熱帯季節林での蒸発散の観測結果から、



写真9:招待講演中の GEWEX GHP 共同議長の Jan Polcher 博士

全球大気海洋結合モデルによる大陸規模のアジアモンスーンシステムの将来予測まで多岐に渡りました。参加者は2日間で62名で、両日とも活発な質疑応答が行

われました。MAHASRI 以降のモンスーンアジアの水文気候研究の計画の立案に HyARC の貢献が求められています。(藤波 初木)

IHP トレーニングコース

第24回 IHPトレーニング・コース

(Forest Hydrology-Conservation of Forest, Soil, and Water Resources)

IHPトレーニング・コースは、ユネスコ国際水文学計画(IHP)への協力として、主にアジア・太平洋地域の若手研究者・技術者を対象として、当センターと京都大学防災研究所とで交互に毎年開催しているものです。今年度は、当センターにおいて、11月23日(日)から12月7日(日)の間、表記「森林水文学-森・土・水の保全のために」をテーマとして開催されました。特に今回は、文部科学省の平成26年度政府開発援助ユネスコ活動費補助金と本学など4大学が共同で推進する「地球気候系の診断に関わるバーチャルラボトリの形成」プログラムの支援を受けています。

参加者は、ユネスコジャカルタ事務所より推薦された5名、上記支援による5名、京都大学の留学生2名の計12名の研修生と、文部科学省による補助金によりアメリカ・ハワイ大学、イギリス・ランカスター大学のそれぞれから2名の著名な森林水文学者を基調講演者として招聘しました。ほとんどの講義は慶應義塾大学

の協力を得てウェブ配信されました。また、東京大学生態水文学研究所、京都大学森林水文学研究室のそれぞれの森林水文試験地において野外講義が行われました。最終日には、各研修生による「本トレーニングコースで学んだこと」に関する発表が行われました。その数日前から研修生が一生懸命、準備をしていたのが印象的でした。研修の合間には、名古屋・京都市内での日本文化体験もあり、楽しいこと・辛いことが入り混じった思い出深い2週間でありました。(熊谷 朝臣)



写真 10 : IHP トレーニング・コース 講義の様子。

地球水循環研究センター公開講演会

2015年1月10日(土)、シンポジウムホールにおいて「環境災害リスクと地球水循環研究」というテーマで開催しました。社会的関心の高いテーマであったこともあり、大学生を含む様々な年齢層で過去最多の143名の参加がありました。

檜山哲哉教授による趣旨説明とリスク概念の説明の後、坪木和久教授から、極端気象研究、特に雲解像モデルを用いた台風の将来予測についての最新の知見が紹介されました。次に鈴木康弘減災連携研究センター教授からは、今年が阪神・淡路大震災後20年であることから、その後の神戸地域の活断層研究の成果とともに、地震災害の低減(減災)に向けた提言を交え、地域固有の自然の特徴を知ることの重要性が解説されました。最後に牛山素行静岡大学防災総合センター教授からは、過去の気象災害の変遷を教訓に、気象災害、地震災害、津波災害に対する人間の取るべき対応方法の違い、防災上の基本的な考え方が解説されました。

講演の後、檜山教授の司会進行のもと、3名の講演者によるパネルディスカッションを行いました。参加者

から自由に質問を受け付ける対話型のパネルディスカッションにしたこともあり、たくさんの質問が講演者に投げ掛けられました。自然現象そのものの丹念な調査の重要性や、環境災害に対するリスク低減に向けた準備と行動の大切さが認識され、防災や減災のために地球科学、特に地球水循環研究が果たす役割は何かを参加者とともに深く考える良い機会になりました。

(檜山 哲哉)



写真 11 : 講演会の様子。

上田博教授の最終講義および退職記念祝賀会を開催

2015年3月3日に上田博教授の定年退職を記念して最終講義を名古屋大学野依記念学術交流館で開催しました。最終講義は「SCRUTINIZE THE PRECIPITATION CLOUDS」というタイトルで、英語で行われました。上田教授の大学院生時代から退職までに行ってきた雪の結晶の研究、ドップラーレーダを用いた降水システム内部の気流構造の研究、西太平洋域から東アジア域における非常に湿潤な領域における降水システムの特徴に関する研究などの話題が、様々な観測のエピソードとともに紹介されました。近年、取り組んでいる偏波レーダを用いた降水粒子の判別とその可能性につい

ての紹介もありました。最終講義には151名の方が参加してくださいました。最終講義の後、名古屋マリオットアソシアホテルにおいて、退職記念祝賀会を開催しました。祝賀会には上田教授の恩師である菊地勝弘北海道大学名誉教授・秋田県立大学名誉教授をはじめとして、様々な研究プロジェクトを上田教授と一緒にやってきた共同研究者、名古屋大学の同僚、北海道大学と名古屋大学における研究室の卒業生に加えて、台湾と韓国からの研究者も含めて110名以上の方が駆けつけてくださり、同窓会のような和やかな雰囲気での歓談がなされました。（篠田 太郎）



写真 12：最終講義 会場の様子。



写真 13：最終講義で講演する上田博教授。

異動教員の挨拶

21世紀初めからの名古屋大学での14年を振り返って 上田 博

2001年1月1日付で大気水圏科学研究所に赴任し、2001年4月1日からスタートした地球水循環研究センター所属となり、14年間になりました。以前から大気水圏科学研究所と種々の共同研究を行っていましたが、地球水循環研究センターでは立場が変わって、共同利用研究施設の一員として全国の研究者の研究プロジェクトのお世話をすることになりました。共同研究は新たな研究を行うことができ楽しいものでした。また、多くの博士課程と修士課程の学生と一緒に研究ができ、大学を巣立った学生達が社会で活躍する姿を見て、名古屋大学での15年間は楽しいものであったと思います。全員の顔がわかる小規模研究施設の良さを実感しました。この間に、大学が法人化され、地球水循環研究センターは全国共同利用・共同研究拠点として認定され、中期目標・中期計画の第3期目を迎えようとしています。新たな発展を期待されている、私たちの研究分野の一つ「災害をもたらすような激しい気象現象の研究」に関しては、中国・韓国・台湾の主要大

学の「追いつけ追い越せ」の目標にされてきた気がします。観測・解析・数値実験の全てにおいて、日本企業の機器製造力と研究者の数値モデル開発技術のレベルの高さに助けられて、私たちはアジアでの先端研究で主導的な役割を果たしながら共同研究を進めることができました。しかし、東アジアの主要大学としてのレベルアップに熱心で、規模では名古屋大学を凌駕し、種々の分野で名古屋大学を追い越そうとしています。これらの大学と切磋琢磨し、世界的にもリードしていくためには、先導的な研究部門を集中的に発展させる戦略が必要だと思います。研究施設の規模を大きくし、かつ、日本だけでなく世界の研究をリードする大規模な研究プロジェクトを担う体制づくりも求められています。現在の地球水循環研究センターの皆さんの頑張りによって、名古屋大学の百周年記念の時に、百周年記念をだいぶ前に終わっている日本の主要大学にはない、名古屋大学独特の魅力をアピールすることができるようになっていくことを期待しています。これまでの皆さんの協力に感謝いたします。

退職の挨拶

森本 昭彦

2003年10月に着任し、早いもので11年もの間 HyARC でお世話になりました。東シナ海から日本海への栄養塩の水平的な輸送が日本海の低次生態系に与える影響を調べたく、海洋での物質循環を精力的に研究している HyARC ならばそれが可能になると考え異動してきました。着任当初考えていた研究はもちろんのこと、それ以上の研究を行うことができたと思います。これは、HyARC のある意味自由で、すぐに成果のでない研究にも寛大に対応してくれる風土によるところが大きかったです。また、共同利用・共同研究を実施することで多くの新しい出会いがあり、そこから発展した、海洋レーダを使った研究や大気海洋結合モデルによる研究などは、私の研究の幅を広げるとともに新しい研究

方針を与えてくれました。

4月からは愛媛大学の沿岸環境科学研究センター (CMES) へ異動し、HyARC で行ってきた研究を発展させるとともに、新たに瀬戸内海の研究を始めることになります。CMES も HyARC と同じぐらいの規模の研究センターです。規模の小さい研究センターは今後ますます大変な状況になっていくと思いますが、HyARC で経験したこと、HyARC で身につけた研究に対する考え方を忘れず、様々な難しい問題を解決していきたいと考えております。

研究の方向性が決まる30代のほとんどを HyARC で過ごすことができ、本当に良かったと思っています。今後は、計画研究や研究集会など外から HyARC の活動に協力したいと考えています。11年間、本当にありがとうございました。

平成 26 年度学位授与

大学院環境学研究科地球環境科学専攻

修士 (理学)

- 牛田 祐貴 PALAU2013 期間中に観測された降水セル上部における雲・降水粒子の粒径分布特性
大脇 良夫 PALAU2013 で観測された降水システム内の雲微物理学的構造
小木 瑞 台風が東シナ海の海洋環境に与える影響に関する研究
酒井 貴紘 北西太平洋夏季モンスーン期に観測されたシアー場における降水形成過程
藤井 秀太 モンゴル周辺域における夏季降水量の経年変動と大気循環場について

修士 (環境学)

- MAURE Eligio de Raus
Influence of mesoscale eddies on spatial and temporal variability of spring phytoplankton bloom in the Japan Sea

- XU QIAN Phytoplankton Distribution in Tsushima Strait and the East China Sea derived by Photosynthetic Pigments combining with Multiple Excitation Fluorescence Method

課程博士 (理学)

- XU Yonghiu Satellite-based Study of Interannual Variation of Abundance and Seasonal Transport of Giant Jellyfish, Nemopilema nomurai, in the Yellow Sea and East China Sea
WANG Shengqiang Remote Estimation of Phytoplankton Size Structure Using Light Absorption Spectra
豊嶋 紘一 Early evaluation of the Global Precipitation Measurement (GPM) Dual-frequency Precipitation Radar (DPR): The relation of radar sensitivity with the regional precipitation characteristics

人事異動 (2014.9.1~2015.3.31)

採用

2014. 9. 1 新妻 亮子 事務補佐員
2015. 2. 1 吉岡真由美 特任助教

定年退職

2015. 3. 31 上田 博 教授

退職

2014. 8. 19 渡辺 絢子 技術補佐員
2015. 2. 28 LEE Keunok 研究員 (任期付正職員)
2015. 3. 31 森本 昭彦 准教授
伊藤 雅 研究員 (任期付正職員)

- 山本菜花子 非常勤研究員
林 利江子 技術補佐員
時政 辰夫 招へい教員 (客員教授)
織田 洋一 招へい教員 (客員教授)

所属換 (環境学研究科へ)

2015. 3. 31 安田 公明 寄附研究部門教授
本巢 芽美 寄附研究部門助教
深田 亮平 事務補佐員
宮原 正典 招へい教員 (客員教授)
永田 哲朗 招へい教員 (客員教授)